

同志社大学

2012年度 卒業論文

論題： 喫煙所に社会的機能は見いだせるか
——喫煙所での会話ログを用いたネットワーク分析研究——

社会学部社会学科

学籍番号：19091082

氏名：植田 拓郎

指導教員：立木 茂雄

(本文の総字数：25,096字)

要旨

論題：喫煙所に社会的機能は見いだせるか

——喫煙所での会話ログを用いたネットワーク分析研究——

学籍番号 19091082

氏名 植田 拓郎

「百害あって一利なし」この言葉に形容されるように、近年急激に広がる禁煙ブームは多くの喫煙者、愛煙者の頭を悩ませている。しかし、禁煙ブーム到来に影響により限定的で狭くなった喫煙所には思わぬ副産物が生まれるようになった。見知らぬ他者との接触が増えたことによって、喫煙所はふだん自分の属する社会圏では容易に得ることができないような貴重な情報を享受できる場となったのである。筆者はこの喫煙所で感じる経験的なモノを本論文のスタート地点として、分析を進めていく。

本論文では、弱い紐帯、社会関係資本の概念をベースに論を展開し、分析の結果、1.喫煙所には弱い紐帯から成る社会関係が存在すること、2.喫煙所は弱い紐帯のポジティブなアウトプットを享受できる機能を持つこと、3.喫煙所には社会関係資本の根幹となる社会的交換や一般的互酬性が確認され、それらが喫煙所を社会関係資本たらしめていたこと、の三点を明らかにし、喫煙所の社会的機能を示した。

キーワード：喫煙所 弱い紐帯 社会関係資本 社会的交換 一般的互酬性

目次

はじめに.....	1
第一章 概念のまとめ	
1.1 弱い紐帯.....	1
1.2 社会関係資本.....	2
第二章 先行研究	
2.1 『弱い紐帯の強さ』.....	2
2.2 『オンラインコミュニティと社会関係資本』.....	3
第三章 分析	
3.1 調査の対象と方法、経過.....	4
3.2 会話ログ分析 (1).....	4
(1) 統計的な分析	
(2) 質的な分析	
3.3 会話ログ分析 (2).....	16
3.4 分析のまとめ.....	20
おわりに.....	21
参考文献	

はじめに

「百害あって一利なし」この言葉に形容されるように、近年急激に広がる禁煙ブームは多くの喫煙者、愛煙者の頭を悩ませている。どんどんと値上がるタバコの価格などによる半ば強制的な喫煙の抑圧、メディアによる喫煙の害の恐ろしいような告知やかつてはCMや映画の中で見られた喫煙シーンの削減、私たちが普段足を運ぶような居酒屋やカフェにおける完全禁煙など、喫煙者たちは隅へ隅へと追いやられ、過激な嫌煙者たちからは白い目で見られている。私自身も喫煙者であるが、このような肩身を狭い思いをすることは日常的にしばしば感じ、禁煙ブームがとても他人ごとではないことを嫌でも感じさせられている。身近なところでは、同志社大学のキャンパス内の喫煙スペースが極端に減ったケースもそうである。私が大学に入学した当時～数年の間は今出川、新町キャンパス共にそこそこの喫煙スペースがあり、さほど問題はなかったのだが、それも禁煙ブームの影響か1～2年前ほどから両キャンパス内の喫煙スペースも極端に数が減らされることとなった。この影響で大学内の数少ない喫煙所には、そのキャパシティを超える喫煙者が一か所に群がるという光景をしばしば目にし、私自身もなかなかツライ喫煙ライフを余儀なくされ日々を過ごすようになった。

しかし、この急激な禁煙ブームの到来により、同時に喫煙所では面白いことが起こるようになった。それは、今まで関わることの無かったような他の喫煙者と会話を交わす機会が増えたことである。かつては喫煙所自体の数が多く、そのスペースも広いものであったが、禁煙ブーム到来に影響によりそのスペースは少なく限定的なものとなり、それに応じて見知らぬ多様な喫煙者との距離が狭くなったのである。この影響もあってか私自身今まで関わることのなかったような、他学部の学生や他サークルの学生、どこかの学部の教授や大学警備員やかつては仲が良かったが久しく会っていなかった友人たち、また大学キャンパス外の喫煙所においても見知らぬ他者と会話を交わすという機会が頻繁に起こるようになった。そして意外なことに、そのような縁の薄い人たちとの間で交わされる喫煙所でのやりとりには私自身にとって有益だと感じる事が、体感的にだがしばしばあった。

私はこのような経緯を経て、今回卒論のテーマに喫煙所を選択した。よって本論文では、このように筆者が体感してきた事象を会話ログデータとして用い、それもとに現在の喫煙所にはいったいどのような社会関係が見られるのか、どのような機能があるのか、またそのような社会関係や機能はどのように生成されているのかという疑問を弱い紐帯や社会関係資本の概念をベースに論じ、喫煙所の実態に迫っていきたいと考える。

1章 概念のまとめ

1.1 弱い紐帯

紐帯とは社会ネットワーク分析を行う際にたびたび用いられる用語で、ネットワークを構成する人物を点と捉え、人物間の関係を線で捉える時この線にあたる部分を紐帯という。マーク・S・グラノヴェッター（1973=2006）は、個人と個人を結ぶ二者の関係つまり紐帯の関係性の強さを、相手と接触する時間量、親密さ、情緒的な強弱、相互の助け合いによってはかることができるという。この指標に基づいて考えるならば、例えば家族や親しい友人のような比較的長い時間を共有し、親しい間柄との人間関係は強い紐帯ということがで

き、逆にたまに会うくらいの知人や初対面の人のようなほとんど同じ時間を共有せず、情緒的な強さもさほどないような間柄の人間関係は弱い紐帯とすることができる。小林・池田（2005）によれば、強い紐帯は社会的属性や類似性の高い同質の他者によるネットワークを形成しやすく、そのネットワーク内での強い情緒的な結びつきや様々なサポートを受けやすいという。逆に、弱い紐帯は内輪で閉じることなく外に開かれたネットワークを形成しやすく、異質な他者との接触や普段得られないような貴重な情報を受けやすいという。また、グラノヴェッター（1973=2006）によれば弱い紐帯のポジティブなアウトプットとは、1.ネットワークの拡散、2.下位集団間の結合、3.転職情報収集などの実質的機能において有効性があることであるという。

この紐帯の強弱は、社会関係資本と密接に関係するものであるため、続いて社会関係資本の概念のまとめを述べていく。

1.2 社会関係資本

社会関係資本とは、人々がなんらかの行為をする際、その行為の結果をより良いモノへと促す資源である。ジェームス・S・コールマン（1988=2006）は、社会関係資本の形態を3つに分けて定義しており、一つは信頼性に依存する恩義と期待、一つは情報源、一つは社会規範であるとしている。一つ目の信頼性に依存する恩義と期待とは、つまりAがBのために何かを行い、Aは将来Bがそのことに対しなにかしら報いてくれると信頼するならば、Aには期待が生まれ、Bには恩義が生まれるということだ。よって、もし社会集団の中にこのような高度な信頼がなければ、このような恩義と期待が存在する社会は存在しないということになる。二つ目の情報源とは、つまり、情報とはその人が何かをしようとする際の基盤になる部分にあたるわけだが情報を得るには時間であったりお金であったり何かしらのコストが必要となるが、この時情報を獲得する手段として、社会関係を利用できるということである。例えば、世間の事には関心がないが一応主要なことくらいは知っておきたいと思った時、そのようなことに関心を持つ家族や知り合いを情報源をし、頼るのである。そうすることで自分でニュースを見たり新聞を読んだりする時間的コストを低減することができる。三つ目の社会規範とは、つまり、ある社会の中に効果的な規範があった場合それは社会関係資本となるということだ。例えば、親が同伴していない場合でもその社会の中に、近くの大人が一人の子供の面倒をしっかりと見るといった規範があれば、その親は安心して子供を一人で遊ばせることができるということである。

社会関係資本とは、この三つの形態を有する社会構造であったり、社会関係そのものを指す場合もある。

また小林哲郎・池田謙一（2005）は、ロバート・D・パットナム（2000）のいう結束型の社会関係資本と橋渡し型の社会関係資本についての概念にも触れているが、これについては次章の先行研究で詳しくみようと思う。

2章 先行研究

今回本稿を書くにあたり、喫煙所に関する多くの先行研究をあたってみたがそのほとんどは喫煙と健康に関するものであり、喫煙所で構築される社会関係を弱い紐帯や社会関係資本などの視点から分析している論文は全くといっていいほど無かった。故にここで筆者

が挙げる先行研究は、喫煙所やそこで生まれる社会関係に直接関係しているものではないが、弱い紐帯や社会関係資本といった視点から分析を試みているものを選び、紹介する。

2.1 『弱い紐帯の強さ』

この論文は、小規模な相互作用の一側面である個人間の紐帯の強さが、どのように情報伝達や社会移動などマクロレベルの現象に関連しているのかという問いを明らかにする研究（グラノヴェッター 1973）である。

グラノヴェッター（1973）は、まずはじめに個人間の二者関係、つまり紐帯の関係性の強さを、時間量、親密さ、情緒的な強度、相互の助け合いの4つの指標を用いてはかると定義する。この定義にしたがえば、仲の良い友達や家族などは強い紐帯、たまに会うくらいの知人などは弱い紐帯ということができるという。

次にグラノヴェッター（1973）は、強い紐帯の持つ推移性について論じる。推移性とは、ABCの三者から構成される関係で、AとBが親しい友人（強い紐帯）で、AとCも親しい友人同士（強い紐帯）ならば、BとCは思考、行動、価値観が互いに類似し、接触機会も多くなり、親しい友人となる圧力が働く、というものであり、この性質から、強い紐帯は閉じられた集団を形成しやすく、集団間を繋ぐ最短経路である局所ブリッジになれないという。

彼はこの論の展開から、推移性が弱く、局所ブリッジになりやすい弱い紐帯には、1.ネットワークの拡散、2.下位集団間の結合、3.転職情報収集などの実質的機能において有効性があると論証する。そしてその結果から、集団の連帯感を高める点では強い紐帯が優位であるが、分化した社会の全体的な統合においては弱い紐帯が大いに力を発揮するという結論にたどりつく。

2.2 『オンラインコミュニティと社会関係資本』

この論文は、社会関係資本の文脈からオンライン上での集会的コミュニケーションに焦点を当て、インターネット利用が民主主義的な参加のベースに繋がる社会関係を促進するのか、オンライン上で形成された社会関係資本はオフラインへとあふれ出すのか、インターネットは民主主義の質を向上させるのかという問いを明らかにする研究（小林・池田 2005）である。

小林・池田（2005）の研究では、まずはじめに社会関係資本のあり方から論じられている。小林・池田（2005）はパットナム（2000）のいう二種類の社会関係資本、すなわち同質な他者によって形成される緊密なネットワーク、情緒的・道具的サポートの互酬、強い紐帯といった特徴を持つ結束型の社会関係資本と、異質な他者によって形成される開放性の高いネットワーク、普段得られないような貴重な情報の互酬、弱い紐帯といった特徴を持つ橋渡し型の社会関係資本をベースにして論文を展開させていく。

社会関係資本論の議論においては、民主主義の円滑な運営のために異質な他者とのコミュニケーションとそれに必要なスキルを磨くための橋渡し型の社会関係資本が重要となる。コミュニケーションメディアでもあるインターネット利用は同じ社会関係資本論に沿って研究がされても妥当と言えるが、そのような議論がなされていないため、本研究によって社会関係資本における一般的互酬性の役割とインターネット利用の関係を検討している。

小林・池田（2005）は、社会関係資本の根幹となる社会的交換や一般的互酬性、一般的

信頼感について論じ、そこからインターネット利用が民主主義的な参加のベースに繋がる社会関係を促進するのか、オンライン上で形成された社会関係資本はオフラインへとあふれ出すのか、インターネットは民主主義の質を向上させるのかという問いをたてる。この問いに答える前に、オンラインにおける一般的互酬性と一般的信頼感はインターネットの集会的利用によって醸成される（仮説 1）、オンラインにおける一般的互酬性と一般的信頼感は、オンラインにおける社会参加・政治参加を促進する（仮説 2）、オンラインにおける一般的互酬性と一般的信頼感は、オフラインにおける社会参加・政治参加に対してプラスの効果を持つ（仮説 3）、オンラインにおける互酬性は、コミュニティのコミュニケーション頻度、サイズ、同質性、構造的垂直性、開放性によって規定される（仮説 4）、という 4 つの仮説をたて、検証に入る。

検証には重回帰分析、ロジスティック回帰分析を用い、自らの仮説に対しておおむね肯定的な回答を示した。そして小林・池田（2005）は、オンライン上での社会的交換およびサポートのやりとりを通じて信頼感や互酬性を醸成することができ、またオンライン上で醸成された社会関係資本がオフラインにもあふれ出すことを示した。

3 章 分析

3.1 調査の対象と方法、経過

本調査は、2012 年 8/16 から 11/6 の間に筆者が立ち寄った各地の喫煙所で行なったものである。実際に筆者が立ち寄った、同志社大学新町キャンパス内喫煙所、長崎県長崎市内の某喫煙所、東京京都間新幹線内の喫煙所、内定者研修会場内の喫煙所、の 4 か所の喫煙所において計 10 件の会話を記録することができた。本調査では、喫煙所での日常的なやり取りをありのまま観察したかったため、あらかじめ人や場所、時間を決めることはせず、筆者が立ち寄った喫煙所内でごく自然に知り合った人やそこで始まった会話を対象とした。

喫煙所内で行われるありふれた日常を記録するため、調査方法には参与観察を選んだ。今回実際に行った参与観察のおおまかな流れとしては、筆者が喫煙所に立ち寄り、ごく自然な形でうまれた会話を記録する、というものである。しかし、想像しやすいことだが喫煙所にふらっと立ち寄ったからといってそこで毎度毎度都合よく自然な会話が始まるわけではないのである。無駄足となることが多い状況の中、喫煙所で始まる会話はふいに訪れるものが多いため、事前に準備した録音器具などで会話の初めから最後まで記録するという方法は非常に困難であった。また会話が始まった際に録音器具を出したり、相手に録音していいか、などと聞くこともその場も雰囲気をつぶす恐れがあったため避けた。

よって、今回実際に行った記録の方法としては、喫煙所での会話の終了後、相手の見えない場所でできる限り先ほどの会話を再現するメモをとり、その後あらためて現場でとったメモを精査し会話ログを起こすという古典的なかたちになった。故に再現した会話ログデータには多少の不確実性が残ってしまう懸念があり、そこに本調査の限界があることをはじめに明記しておきたい。

3.2 会話ログ分析 (1)

この節では、喫煙所がはたして本当に弱い紐帯のポジティブなアウトプットを享受できる場として機能しているのか、という疑問を明らかにしていきたい。喫煙所で見られる社

会関係の形態が今までに明らかにされていないことを考慮するならば、まずはじめに喫煙所で構築される社会関係、またそこでもたらされる恩恵がはたして強い紐帯によるものなのか、弱い紐帯によるものなのかを明らかにしておく必要があるからである。

グラノヴェター（1973=2006）によれば弱い紐帯のポジティブなアウトプットとは、1. ネットワークの拡散、2. 下位集団間の結合、3. 転職情報収集などの実質的機能において有効性があると論証する。本稿では、この3点をすべて網羅する時間的余裕がないため今回は3.の情報伝達に関する部分に焦点を合わせたいと考える。またコールマン（1988=2006）のいう社会関係資本の一つである情報源、パットナム(2000)のいう「橋渡し型」の社会関係資本の恩恵についても弱い紐帯のポジティブなアウトプットとほぼ同義と考えていい。つまりこの三つの概念に共通する恩恵とは、普段得ることが難しかったり、コストのかかる情報や異質な他者への接触を低コストで提供する、ということである。よって今回はこの〈情報〉をキーワードにして、分析を進めていく次第である。

以下に示す表1は、今回立ち寄った4つの喫煙所で記録することのできた10件の会話ログデータの観察日時、場所、実際に会話した相手を簡単にまとめたものである。ただし、プライバシー保護のため名前の分かる相手についてはイニシャル表記、名前の分からない相手についてはおおまかな属性で表記することにする。

表1 データの概要

	日付	時刻	場所	対話相手
ケース1	8月16日	A.M.11:00頃	長崎市内 某喫煙所	地元民のおじさん数名
ケース2	8月16日	P.M.12:00頃	長崎市内 同喫煙所	三菱自動車の若手社員
ケース3	8月21日	P.M.2:00頃	同志社大学新町キャンパス喫煙所	大学の警備員
ケース4	8月23日	P.M.12:05頃	内定者研修会場の喫煙所	経営企画部部長Sさん 同期K君
ケース5	8月23日	P.M.10:00頃	新幹線内の喫煙所	外国人留学生
ケース6	9月26日	P.M.12:20頃	同志社大学新町キャンパス喫煙所	同学年の友人H君 2回生のT君
ケース7	10月1日	P.M.12:00頃	内定式会場の喫煙所	経営企画部部長Sさん 執行役員Aさん 同期数名
ケース8	10月2日	P.M.8:00頃	新幹線内の喫煙所	シャープの中堅社員
ケース9	10月6日	P.M.2:20頃	同志社大学新町キャンパス喫煙所	同学年の友人T君
ケース10	11月6日	P.M.2:00頃	同志社大学新町キャンパス喫煙所	同学年の友人T君 同学年の友人Y君

(1) 統計的な分析

この項では、記録した会話ログの内容分析に入る前に集めたデータを統計的に分析していきたいと思う。まずはじめにここで明らかにしておきたいのは、今回各喫煙所で接触し何らかの情報交換をした人物たちが本当に弱い紐帯の人々であったかどうか、ということである。この点を明らかにすることで、今回喫煙所でのやりとりから実際に行われた情報交換が、弱い紐帯によるものなのか、または強い紐帯によってもたらされたものなのかは

つきりしてくると思われるからである。

グラノヴェター(1974=1998)は、対人的な紐帯の強さについて正確に語るのは難しいが、その二者が共に費やした時間の量を目安にすることでおおざっぱではあるが紐帯の強さを測ることができると言っており、また彼は自身の研究で、「しばしば」——少なくとも週に二回以上、「ときどき」——年に二回以上週二回未満、「まれに」——年に一回以下の三つのカテゴリーを接触頻度の目安にして、その紐帯の強さを測っている。

今回筆者もこの指標を用いて、喫煙所で出会った人々の紐帯の強さを測定してみる。なお、上に示した表1では、接触した人物は全部で16名であるがその内ケース3の大学の警備員とケース7の内定者の同期に関しては世間話程度の会話しかしておらず情報交換はなされていないため、この分析から除外し実質14名を対象に分析を行った。その結果、今回筆者が喫煙所出会った対象者の中で人的つながりによって何らかの情報交換人々のうち、「しばしば」つまり週に二回以上会う人物は0%、「時々」つまり年に二回以上会うが週に二回未満程度会う人物は64.3%、「まれに」つまり年に一回以下しか会わない、もしくは初対面の人物は35.7%であった。この数値からわかるように筆者が喫煙所で会話を行い、なんらかの情報を交換した人物は全体的に弱い紐帯である傾向が強いことがわかった。

また、この結果に併せて、調査した会話ログデータから実際にどれほどの頻度で情報交換がなされていたのかを示しておく。今回調査し記録した全会話ログから情報を思われるコメントを抽出し、その数をケース1~10までの10回の会話で割ることとする。この際も同様に、情報ではあるがさほど重要とは思われない情報は除外して計算する。例えば「私は福岡県出身です。」とか「私は明治大学です。」などのような情報は除外して考えるといった感じである。重要である情報とそうでないものの判断基準に関しては後述する。

それらを考慮して分析した結果、全10回の会話の内とりわけ筆者もしくは対象者にとって重要だと思われる情報を含んだコメントは22件確認できた。つまり今回の調査によって得られた10ケースの会話の情報提供率(全会話10ケースに占める、情報提供コメントの割合)は220%であり、言い換えるならば喫煙所での会話を一度するたびに有益な情報を平均2.2件交換することができる、ということがわかった。(この場合、22件/10件×100=220)。

さて、ここまでの統計的な分析により、1.喫煙所において何らかの情報を交換する相手は全体的に弱い紐帯であること、2.喫煙所での会話一度に含まれる重要な情報は平均2.2件であることが明らかになった。しかし、ここで上記の全会話ログデータに含まれる有益な情報の割合を出す際に筆者が述べた「さほど重要とは思われない情報は除外して」の部分について言及しておかなければならない。さまざまある情報をどのように重要であるか否かに分類したのか、また選別する際の基準についてである。この点に関してはやはり筆者の主観が入ってしまうことは否めないが、ある程度は客観的に分析することも可能であると考える。グラノヴェターは自身の研究において、転職情報はどのような紐帯の人々によって知らされたかについて調査しており、彼は〈転職情報〉を価値のある重要な情報と判断している。それは、転職情報というものが自分の属する社会圏では容易に入手することが難しく、多くの場合が自分自身の社会圏とは異なる社会圏に属する人からもたらされると考えているからである。このことを踏まえて考えるならば、つまり重要で有益な情報とは、自分の属する社会圏では容易に入手することの難しい情報のことである。故に筆者は上記の分析を行う際に、自分の属する社会圏では容易に入手することが難しいかどうか、という基準で情報の重要度を決めたのである。次項においてもこの点を絡めながら、実際

に記録した会話ログを用い質的な分析に入っていきたい。

(2) 質的な分析

ここでは、実際に記録した会話ログをもとに質的な分析をおこなっていく。前項に引き続き各喫煙所で接触し何らかの情報交換をした人物たちが本当に弱い紐帯の人々であったどうか、について明らかにしていくが、ここで特に注目していきたいのが実際に交換された情報の質である。いかに喫煙所で弱い紐帯の人々と出会い、情報交換が行われたとしても、その情報がさほど重要ではなく価値の低いモノばかりであるなら、喫煙所が本当に弱い紐帯のポジティブなアウトプットを享受できる場として機能しているのか、という筆者の疑問に答えられないからである。

前項でも筆者が述べたように、重要で有益な情報とは、自分の属する社会圏では容易に入手することの難しい情報のことである。故にここから入る会話ログの質的な分析においては、とりわけ喫煙所で実際に行われた会話の中で交換される情報が普段自分の属する社会圏では入手しづらいモノであるかどうか、という点に注目していきたい。つまりこの会話ログ中にある情報に注目し分析することで、同時に喫煙所での情報交換が弱い紐帯によって行われていることも示していきたいのである。

まずはじめに示す会話ログは、上記した表1のケース1にあたる会話の全容である。このケース1は筆者が記録した会話ログの中でも比較的シンプルな内容で、弱い紐帯のポジティブなアウトプットを享受できているという説明のしやすいものであるためチョイスした。

このケース1に出てくる登場人物は、筆者である自分と長崎市内の地元民数名である。舞台となる長崎市内の喫煙所は、夏休みを利用して筆者が九州バイク旅をしている途中にふらっと立ち寄った場所で、筆者が喫煙所に入る前にすでに数名の地元民が談笑しているという状況であった。上記の説明からわかるように、当然筆者とこの地元民たちはまったくの赤の他人で初対面である。以下の会話ログケース1がそのような状況で行われたやりとりの詳細である。

(自分が喫煙所に入ると地元民数名がこちらに注目する)

地元民:おー、兄ちゃん。そんなとこ立っとらんとこっち座り！そっち暑いやろ。

自分:あ。ありがとうございます

地元民:今日はえらい暑っついもんなー。あ、ところで兄さん、ごめんけどタバコ一本もろていいやか？ちょうど切らしちゃって(笑)

自分:いいですよ(笑)

地元民:おー、ありがとう！

地元民:(筆者の荷物を見ながら) ヘルメット持っとるけど、バイク旅か何かかね？

自分:あ、はい、そうですね。福岡から出発して、九州周ってるんですよー。昨日の夜長崎に入ったところでして…。

地元民一同:へえー、そらすごいなあ。

省略

地元民:へえーこれから熊本向かうんね。そしたら雲仙の方むかって、、、57号通ると？

自分:はい、地図見たらそれがいっちゃんわかりやすいし、そのルートで行こうかと。

地元民:あー(周囲の地元民と顔を合わせながら)、それやったら途中から58号に入った方がいいよ。57号は車多いけん。58号入った方が気持ちよ一走れると思うよ。①

自分:あ、そうなんですか？そしたらその道も検討してみよっかな…。ありがとうございます。

省略

自分:そういえば自分今からそこ(長崎中華街)でチャンポン食べようと思ってるんですけど、いっちゃんおいしいとこってどっかありますか？

地元民:んー、いっちゃんうまいとこかー(新しい地元民と思われる人が喫煙所に向かってくるのを見つけて)おう。ちょうどいいとこ来なさったわ。おーい、この兄さんがそこでうまいチャンポン食べたいっち。やっぱ蘇州林か？

地元民(新):あ？チャンポン？たら、そうやろ。(筆者の方を向いて)チャンポンやったらそっから入って一、二軒目の右っかわにある蘇州林ってところが、この辺じゃ一番おいしかよ。②

地元民:やっぱそうやんね。(指さしながら)そっから入ってもうすぐやけん。

自分:蘇州林ですね。ありがとうございます。(タバコの火を消し)そしたら自分そろそろ行きますんで、ここで失礼します。

地元民一同:おう、そしたら気を付けりね。タバコありがとうね！

と、ここで筆者はお辞儀をしながら喫煙所を後にする。

このケース1の会話は主に筆者と地元民との雑談であるが、ところどころに情報提供のシーンが見られる。文中に引いている下線部がその情報と思われる箇所である。情報①、②を見てもらえればわかると思うが、①②共に長崎県に住み、普段そこで生活をしている地元民ならではの情報であり、筆者はこれらの情報を、観光雑誌を読んだり地図を調べる時間的コストをかけずに得ることができたと言える。また特に情報①においては、筆者自身が地図や観光雑誌を読んだとしても得難い情報であり、また当然普段筆者が属している社会圏においても得ることが難しい。故にこの一例を見る限りでも、筆者は、自分とは異なる社会圏に属する弱い紐帯の地元民と喫煙所で接触することで貴重な情報を得ることができ、言い換えるならば喫煙所でのやりとりを通して弱い紐帯のポジティブなアウトプットを享受することができたと考えることもできる。

しかし、この具体的な会話の内容だけでは、喫煙所がはたして本当に弱い紐帯のポジティブなアウトプットを享受できる場として機能しているのかという筆者の疑問を裏付けるには少し弱い。確かにこの時の筆者にとっては得難い有益な情報ではあったが、この情報はあまりにもこの場、この時に限る限定的なもので汎用性の低い情報のように思われるからである。

そこで今見たケース1の会話ログよりも、もう少し汎用性の高さをも含むような会話ログ及びそこにみられる情報を分析していきたいと思う。これから示す会話ログは、上記した表1のケース6にあたる会話の全容である。まず先にこの会話ログに関する情報を記しておく。ケース6に出てくる登場人物は筆者である自分、同級生のH君、秋学期の授業で偶然同じグループになった2回生のT君の三名である。同級生のH君とは同じサークルであり、かつては「しばしば」会う仲であったがここ1~2年は週に一度同じ授業で「時々」会う仲である。二回生のT君は、喫煙所で話したこの日初めて授業で同じグループになり挨拶を交わした程度の「まれに」会う間柄で、この指標で見ると二人とも筆者とは弱い紐帯の関係である。この日、二限の授業を終え、同級生のH君と共に同志社大学の新町キャンパス喫煙所に向かい雑談するところから以下の会話が始まる。

H君:はあ…。この授業、グループ作って発表とかダルいなあ。

自分:え、そう？オレ的にグループワークのが楽な気ーするけどな。三回生の時のこの授業は個人単位での作業やったけ、グループワークのがありがたいわ。

H君:いやなんというか、班のメンバーと仲良くなれたらグループワークのが楽やねんけど、仲良くなるまでがダルイねん。前別の授業でグループワークやった時、周りの奴らがホンマ何もせん他人任せな奴らやってめっちゃめんどくさかったんや。

自分:あー、確かにそんなメンツになったら最悪やな(笑)

H君:まあ今回一緒になった人らは良さそうで良かったけどな。

自分:そやな。まあRさんとかスゴイ真面目そうやったし、何とかなるっしょ。T君はよーわからんけどな(笑)

H君:せやな、T君よーわからへんな(笑)普通にいい子そうやったけど、単位ヤバイゆーとったからな(笑)

自分:(笑)でもG先生もT君に目つけとったし、さすがにこの授業は頑張るやろ。

…(T君が向こうから歩いてくるのを見て)あれ、T君じゃね？

H君:あ、ほんまや。

(T君が会釈をしながら喫煙所に入ってくる)

T君:あれ、Yさんに植田さんじゃないですか。こんにちは。

自分:おお、T君さっきぶり(笑)タバコ吸うんだ？

T君:はい。僕結構ここいますよ。

自分:ホントに。オレらも大学に来る日は結構おるよ(笑)

T君:マジですか(笑)　　そういえばさっきの授業グループ分けとかやりましたねー。なんか結構ダルそうな予感が…

自分:まあね(笑)オレこの授業これで三回目なんやけど、グループ分けは初めてやわ。
でも、G先生ちゃんと出席しとけば単位くれるよ。①(友達の方を向いて)なあ？

H君:せやな。G先生基本出席しとけば単位くれるわ。

T君:そうなんですか？なら安心ですけど…。あ、そういえばお二人はゼミどこですか？

H君:ん？オレはOゼミやで。

自分:オレはTゼミ。T君しゃかしゃかやっけ?

T君:はい。三回からゼミ始まるんで、そろそろ考えないといけないんですよ…。

H君:あー、そういえば春休みらへんに決めたなあ。②懐かしいわ(笑)

T君:え、春休みに決めるんですか?てか、どうやってゼミって決めるんですか?

H君:確か春休みにしゃかしゃか全員集まって、その場で決めたような…

第一〜第三希望を紙に書いて提出して一みたいな。

あ、でも、どっか一箇所に人集まり過ぎたら抽選みたいなき感じになるけどな(笑)

③

自分:あー、懐かしいなそれ(笑) 確かK君(別の同級生)だけ抽選で希望のゼミ行けんかったよな(笑)

H君:せやせや(笑)でも、あんまFゼミ行かんで良かったと思うで。

T君:え、なんでですか?

自分:なんか毎年Fゼミが楽って噂でスゴイ人集まるっぽいやけど、今年からスゴイ厳しくなったらしくてみんな嘆いとるんよ(笑)④

T君:え、マジですか。

H君:うん(笑) まあOゼミも楽では無いけど、向こうの話聞いてたら比べたらまだマシやと思うわ。

T君:へえ〜、それは残念ですね。ちなみにOゼミとTゼミはどんな感じなんですか?

自分:うちのゼミは、ゆる過ぎず厳し過ぎずって感じかなー。三回の時とかはフィールドワーク結構やったりゲームみたいなももしたけ、ずっと文献読むみたいなのが嫌いやったらうちのゼミいいかも。四回なっても基本研究室で作業しとるから、めっちゃ気楽な感じはあるかな。⑤

H君:Tゼミめっちゃええよなー。メンバー仲いいし、卒論も結構早めからやっとるんやんな?うちメンバーがバラバラやし、三回ずっと文献読みやったら卒論ヤバイわ(笑)⑥

自分:なんかそれ他のゼミのヤツらも言ってるわ。最近やっ卒論の話になって無理やわ、みたいな(笑)

H君:いやホンマそれやで。

T君:そしたらTゼミがイチオシなんですかね?

自分:んー、まあ個人的にはオススメやけど、別にめっちゃ楽とかやないからその辺は自分選んでくれ(笑)

T君:なるほどー。Gゼミとかはどうなんですか?

自分:んー、とりあえずGゼミはオレらん時もかなり人気やったよな?

H君:せやな。だいたい最初みんなFゼミかGゼミ選ぶしな。

T君:ゆるいからですか?

自分:そそ。知つとると思うけどG先生優しいからな。でも今Gゼミ行つとる人らも卒論どうしよーって言つとるなあ。多分Gゼミも、ゆるいけど卒論は自力で頑張らなヤバイ系やと思うわ(笑) まあ、来年はまたどうなるかはわからんけどな。Fゼミも急に厳しくなったらしいし、もうその辺は運かもね。⑦

T君:そうですか…。まあまだ時間ありますんで、色んな人に聞いてみときます。ありがとうございます。それじゃ自分そろそろ行きますんで。失礼します。

自分達:おお、それじゃまた来週！

と、ここでT君は喫煙所を後にする。

このケース6では、ケース1の時とは立場が異なり、主に二回生であるT君が四回生である筆者とH君にゼミに関する質問を繰り返し、筆者たちがそれに答える情報を提供するという内容になっている。前例のケース1同様、ログ中のところどころに下線を引き番号を振っているのは、ケース6の会話においてとりわけ重要だと筆者が判断した情報である。この場合、情報を提供されているT君の状況を考えてみると、彼はまだ二回生であり、三回生から始まるゼミに関しての何の情報を持たない状態、またはそのような情報を容易に得ることが難しい社会圏に普段所属していることが、情報②を受けた後の彼の反応などから見て取れる。それに対し筆者とH君は四回生であり、自分の所属するゼミのことはもちろん、別の友人が所属するゼミの実情も把握できる社会圏で生活している。故にここで行われた情報交換は、二回生と四回生という異なる社会圏で普段生活する者たちによるやりとりであり、喫煙所がその弱い紐帯の二者を結びつける場となっていることがわかる。またここで提供された情報⑤、⑥などは四回生の中でも実際にそのゼミに所属している人しか知らない比較的価値の高い貴重な情報であり、T君以外の二回生にとってもそれはあてはまることから汎用性の高い情報とも捉えることができるだろう。よって、このケース6の会話において二回生のT君は、喫煙所のやりとりを通して弱い紐帯のポジティブなアウトプット、つまり、普段得ることが難しかったり、コストのかかる情報を低コストで得ることができたと言えるのではないだろうか。

ここまでで示してきたケース1とケース6の事例により、喫煙所を媒介としそこで築かれる弱い紐帯の社会関係からもたらされる、異質な他者からの貴重な情報の交換を確認してきた。この2ケースにおいて筆者は喫煙所に見られるポジティブなアウトプットとしての〈情報〉に注目してきたわけだが、ここでもう一例だけみておこうと思う。それは、グラノヴェッター(1974=1998)が論証している弱い紐帯のポジティブなアウトプットのの一つである〈貴重な情報の取得〉に加え〈ネットワークの拡散〉を含むケースである。

以下に示すのは会話ログケース7の全容である。このケース7は、筆者が今年内定をもらった会社の人たちとのやりとりであり、内定式の昼休みでの一場面である。ここに出てくる登場人物は、筆者である自分、式に参加した執行役員のAさん、同じく式に参加した経営企画部リーダーのSさん、他同期の学生数名である。このSさんは前回の内定者研修会の喫煙所で一度話している(表1のケース4にあたる)が、まだ会うのは二回目なので、今回会話を交わしたAさんもSさんも筆者にとって「ときどき」会う弱い紐帯の関係であることがわかる。以下のやりとりは、内定式会場で起こったものの記録であり、式がいったん終わり筆者が喫煙所を探して歩いているところから始まる。

ー 一旦内定式が終わり、筆者が喫煙スペースを探している途中 ー

Aさん:あれ、もしかしてタバコ？

自分:あ、はい。でも、このフロアってタバコ吸えるところ無いですかね？

Aさん:(手招きして)いや、実はここにあるんだよ(笑)

自分:おお、こんなひっそりとしたとこに！笑

自分:あ、お疲れ様です。

Sさん:お疲れ様。…あれ、前も喫煙所でお会いした植田さんじゃないですか(笑) ①

(前回の研修の時、喫煙所で篠崎さんと一度会話を交わしている)

自分:覚えてくださったんですか!その節はありがとうございました!

Sさん:いやいや、大した話はしてないよー(笑)

－ 一同タバコに火を点けようとする中、
自分はカバンにタバコを忘れたことに気付く－

自分:あ、タバコ鞆に忘れてしまった!ちょっと取ってきます!

Aさん、Sさん:あ、それなら僕らので良かったら吸いなよ。どっちがいい?笑 好きな方選び。②

自分:えっ、いいんですか!そしたらマルボロの方を頂きます。ありがとうございます!

Aさん:いえいえ。

Sさん:それにしても今日の式は緊張したねー。内定者の皆さんどころか我々もガチガチでしたね(笑)

Aさん:そうですね(笑)

自分:そうですね(笑) 今日自分が会場に着いた時から誰も喋らないのでスゴイ戸惑いましたよ。

Sさん:ははは(笑) 自由に喋って頂いて結構でしたのに。

自分:いやあ、あの空気の中では喋れませんよ(笑)

Aさん、Sさん:(笑)

Sさん:そういえば先程の自己紹介を聞いてて思ったんですけど、今年の内定者はスポーツをやられてる方が多いですね。特にサッカー経験者が…

Aさん:そうですね。植田さんもサッカーやられてたんですね?

自分:はい、小学校~高校までやってました。自分も内定者の人達と話しててサッカー経験者が多いのにビックリしていました。多分内定者の7~8割くらいいるんじゃないですかね?(笑)

Sさん:それはスゴイ割合だ(笑) でも、うちにこんなスポーツマンが集まるのは珍しいですね。

Aさん:そうですね。どちらかというとなん年スポーツよりかは勉強頑張ってた方が多いですもんねえ。アウトドアというよりインドア派が多いですね。それと留学経験のある方が多いのにも驚きましたよ。

Sさん、自分:(うんうん、と首を振り相槌)

Sさん:時代なんですかねえ…(笑)

Aさん、自分:(笑)

— 内定者達(喫煙者数人+非喫煙者1人)が自分の姿を見かける —

K君:あれ、拓郎——あ、なんだよ、こんなところに喫煙所あのかよ(笑)わかんねー(笑)

一同:うわ、ホントだ(笑)

自分:ああ、姿が見えんと思っと思ったらタバコ吸うところ探しとったんか(笑)

K君:そそ、わざわざ一階まで行っちゃったし——(上司2人に気付いて)あ、こんにちは。あれSさんじゃないですか、こんにちは。

Sさん:(笑顔で) こんにちは。

— 一同がそれぞれに話し出す —

Aさん:そういえばさっきバイクに乗るって言ってたのは植田さんでしたっけ?

自分:あ、そうです。

Aさん:中型?大型?

自分:250の中型です。

Aさん:おお、そっか。どこのバイクに乗ってるんですか?

自分:カワサキのエストレヤって言うのに乗ってます。

— Sさんが会話に加わってきて —

Aさん、Sさん:カワサキかあ…

Sさん:渋いの乗ってますねえ。

自分:いえいえ(笑)もしかしてお二方もバイク乗らはるんですか?

Sさん:僕は乗らないんだけど…Aさんは乗りますよね?今も乗ってらっしゃるんですか?

Aさん:いえ、バイクはだいたい前に降りちゃって。でも最近また乗りたくなってきてるんですけど、この歳になると家族の反対がひどくて…(苦笑い)

Sさん:ははは、わかりますよ。もう歳なんだからやめときなさいって…そんなに歳じゃないっての!(笑)

Aさん:ホントそれですよ!(笑)でもやっぱり娘に言われるとねえ…逆らえんのですわ。

自分:そういうもんなんですかあ…なるほど。

Aさん:そう、だからやっぱり若い時にたくさん乗って、色々なところ周っておくとイイと思いますよ。

自分:そうですね、バイクはこっちにも持って来るつもりですし、そうします。

Aさん:うんうん、でもやっぱり事故には気を付けないとね。(篠崎さんの方を向いて)ほら、確かうちの社員にもバイク好きおったけど、この間事故りましたよね?

Sさん:ああ、——君?

Aさん:そうそう、——君。大した事故じゃなかったみたいで良かったけど…

自分:えっ、ホントですか?もうその方は大丈夫なんですか?

A さん: うん、幸い本人は無傷だったんだけど、バイクの方が廃車になっちゃってね。
せっかくの大型だったのに。

自分: へえー。それはそれは… 自分も乗る時は気を付けます。

A さん: うん。でもその彼、今こっちの寮にいるはずだから、またバイク乗るみたいだから声かけて色々案内してもらおうといいよ。③

自分: そうですね、色々案内してもらいます！ 何さんでしたっけ？

A さん: ——さん。植田さんも寮に入るんだったらすぐ会えると思いますよ。③

自分: わかりました。見かけたら声かけてみます！

自分: あ、そういえば、うちの会社って、三菱自動車さんに何か供給してますっけ？

A さん: 三菱自動車さん？は… (S さんの方を向き) してますよね？

S さん: うん。現行車なら、～とか～とか、～のインパネはうちだよ。④三菱自動車さんがどうかしたの？

自分: あ、やっぱりしてるんですか。いえ、先日バイクで九州周った時に知り合った方が三菱自動車の新入社員で、営業やってるって言ってたので、もしかしたら将来一緒に仕事するかもしれませんねーって言ってたんですよ。

S さん: おお、それはそれは。面白いところで出会いましたね (笑)

自分: そうなんですよ (笑) まさかこんな形でってその方とも話してたんですよ。そういううちと取り引きしてる企業とか、製品とかって、何か知る機会みたいなってあるんですかね？例えば新人研修で習うとか…

A さん: いやあ、研修ではそこまでしないと思うよー。知りたいんだったら、HP に載ってるのを見るか、資料を探すか…それこそ僕たちみたいな上司に聞くくらいしか…⑤

自分: あ、そうなんですか？

S さん: うん。というか、うちの製品がどここの部品に使われてるってのがオープンにされ始めたのが結構最近の話なんだよ。それまでは、基本はそういうことをオープンにしないって感じだったんだよ。⑥

自分: へえ、そうなんですか。…守秘義務的な感じですか？

S さん: まあ、そんなところかな (笑) だから、この部品はうちの製品だよーって声を大にして言えるようになったのは最近の話でね。うちの社員でも製品がどこどこに供給されてるって全部把握してる人はそうそういないんですよ。

自分: ほおー、なるほど。そうだったんですか。

A さん: そうなんですよ。だからうちの会社は超縁の下の力持ちからやっこ、普通の縁の下の力持ちになった感じかな (笑)

S さん: ははは (笑) まさにそんな感じですね (笑)

自分: なるほど (笑)

S さん: あ、それか(うちポケットからビラを出して) こういうメーカーの展覧会に行ってみるのもイイかもね。

自分: (展覧会の概要が書いてあるビラを見ながら) へえー、こういうのもあるんですね。

S さん: うん、毎年幕張メッセとかでやってる結構大きいイベントでね。うちも毎年出させてもらってるから行ってみるといいよ。これ招待券も兼ねてるから。⑦

自分: え、これ頂いていいんですか？

S さん: うん、といってもこれうちの社員みんなもらえるやつだから、気兼ねなくどうぞ (笑) ⑦

自分: ありがとうございます！都合が合ったら行ってみますね。あ、そろそろ昼食の時間ですね。ちょっと僕先にお手洗い行ってきます。

A さん、S さん: はい、では後ほど。

と、ここで筆者は A さん S さんに会釈をし、その場を去る。

今回も今までの分析と同じように重要だと思われる情報に番号をふった。またそれに加えこのケースには情報以外にも、②や⑦のように直接的なモノの提供も見られたのでそのようなやりとりにも番号をふった。特に⑦のやりとりに関しては、企業の展覧会招待券という普段自分のいる社会圏では容易に入手できないモノであり、ここにおいても今までとは少し違う形での弱い紐帯のポジティブなアウトプットが確認されたことがわかる。

さて、今回このケース 7 で特に注目してほしいのは下線部①と③である。まず①に関してみる。この下線部①の S さんの発言は、直接的な情報やモノではないが、かつて喫煙所を通じて築かれた弱い紐帯がその後も繋がり、社会関係を保っているということがうかがえる。そして、ケース 4 の内定者研修会の喫煙所で繋がった S さんとの弱い紐帯が、今回のケース 7 における下線部⑦の直接的なモノの提供といったメリットに繋がったと考えられる。つまり簡単に言うならば、最初に S さんと喫煙所でやりとりしたことがコネという形の社会関係資本を構築し、また逆に考えると喫煙所という存在がそのような S さんとのコネを作る場になったと言えるのである。この下線部①を通じて考えてみても、喫煙所には異質な他者への接触を低コストで提供するという弱い紐帯、橋渡し型社会関係資本のポジティブなアウトプットを享受できる場であると言えることができるだろう。

また続いて下線部③を見てみる。この下線部③のやりとりは、バイクに乗るといふ筆者の情報を聞いた A さんが同じ会社のバイク乗りの社員を筆者に紹介するといったシーンであるが、これはまさにグラノヴェッター(1974=1998)のいう〈ネットワークの拡散〉である。まず今回内定式会場の喫煙所で初めて会い、会話をした A さんは当然筆者が普段生活している社会圏とは異なる社会圏に属する人物であり、この A さんという人物と繋がることのできたことで第一段階のネットワークの拡散が確認できる。そして次にこの第一段階のネットワークの拡散で繋がることのできた A さんの紹介という形で、筆者はまだ知らぬ社員の情報を得ることができ、ゆくゆくは同じ寮に住むこの社員と繋がることのできることで第二段階のネットワークの拡散が期待できる。故に、このケース 7 の下線部①と③は、筆者が会社に入ってから普通は関わることのできないであろう S さんと A さんと喫煙所という場を通じて繋がれたこと、またそこからさらに筆者の知り合いの知り合いという形で、ネットワークの拡散が生まれるであろうこと端的に表した箇所なのである。

さて、ここまで会話ログの (1) 統計的な分析と (2) 質的な分析によって、喫煙所が果たして本当に弱い紐帯のポジティブなアウトプットを享受できる場として機能しているのか、という筆者の疑問を明らかにしてきた。(1) 統計的な分析では、グラノヴェッターの紐帯の強弱をはかる指標を用い、今回喫煙所でやりとりする相手が全体的に弱い紐帯である

こと、また全会話ログ中の情報提供率から、喫煙所での会話一度につき平均 2.2 件の重要な情報が交わされることがわかった。さらに (2) 質的な分析では、喫煙所で交換された情報が、自分の社会圏とは異なる社会圏に属する異質な他者によってもたらされた貴重な情報であること、また喫煙所でのやりとりと通じて普段自分の社会圏とは異なる社会圏に属する人物と社会関係を構築し、ネットワークの拡散がみられたことがわかった。これらの結果はまさしく、グラノヴェッターやコールマン、パットナムの言う弱い紐帯や社会関係資本のポジティブなアウトプットそのものである。故に筆者が冒頭で示した、喫煙所がはたして本当に弱い紐帯のポジティブなアウトプットを享受できる場として機能しているのか、という疑問はこれらの分析結果によって明らかにされたと言える。

喫煙所でこのようなポジティブなアウトプットが観察されたということは、それはまさに喫煙所で構築される社会関係が社会関係資本であるということが出来る。つまり A (社会関係資本)、B (社会関係資本の恩恵)、C (喫煙所で構築される社会関係) と仮定すると $A=B$ 、 $B=C$ 、 $A=C$ であると、簡単に言えばこういうことになる。

しかし、そのように考えるとここで新たな疑問が一つ出てくる。それは、喫煙所での社会関係が社会関係資本であるならば、いったい何が喫煙所での社会関係を社会関係資本たらしめているのだろうか、という疑問である。

この疑問を解く一つのカギとなるのが〈一般的互酬性〉である。小林・池田 (2005) はパットナム (2000) の理論に従い、社会関係資本の根幹を成すのは一般的互酬性で、その一般的互酬性を醸成するのは繰り返し生じる社会的交換であると言っている。続けて小林・池田 (2005) は、ここでいう「一般的互酬性とは『A が B を援助したら、A はコミュニティまたは社会の他の人から (B には限らず) 援助されるだろう』という規範的な認知 (小林・池田 2005:151) であり、もしそのコミュニティの成員がこの一般的互酬性を認知したならば、見知らぬ他者に対しても自発的な情緒的、道具的なサポートを与えるようになるという。

この小林・池田の知見を借り、本論文に当てはめるならば、喫煙所では何らかの社会的交換がなされ、それが一般的互酬性を醸成し、社会関係資本の根幹となっていると言ったことができそうである。よって、次節では喫煙所における社会的交換と一般的互酬性に注目し、分析を進めていきたいと考える。

3.3 会話ログ分析 (2)

前述した通りこの節では、喫煙所を社会関係資本たらしめているものは何なのか、さらに言うなら喫煙所ではどのような社会的交換が見られ、また一般的互酬性が醸成されているのか、について分析を進めていきたいと考える。

今回、まず記録した会話ログにパッと目を通してみると、喫煙所での会話には、誰かがその人にとって役に立つ情報を提供し、情報を提供された人はその提供者に対してお礼を言うといったやり取りがしばしば見受けられることに気付いた。筆者の体感的なものではあるが、確かにここで記録した以外の喫煙所での会話においても、そのようなやりとりはよく見かけるため、これを出発点に実際記録した会話ログデータを詳しく分析していきたいと思う。

以下に示す会話ログの一部が会話ログ中に見られるもっとも簡単なやりとりの例で、このような質問、応答、感謝の一連の流れを一件ととらえる。

省略

T君:え、どういうこと？

自分:いや前、確かうちのゼミの奴が家族社のテスト欠席かなんかしとった時、T先生が「何でなんも言うてこんのかなー。ちゃんと言うて来たらレポートなり代替措置も考えるのに」的なこと言っとったから、もしTもテストやばかったら先生に頼み込んだ方がええかもよ。そしたらレポートとかで救ってくれわるかしらんから。

T君:え、ホンマに？うわ、良いこと聞いたわ！T先生そんな風にしてくれるタイプやないと思っとったから（笑）ありがとー。

自分:まあ単位落とさんよう頑張りや（笑）

上記に示した例は、会話ログケース10のやりとりの一部で、ここではT君が質問し、筆者がそれに対する情報提供をし、T君が筆者の情報提供に対し感謝するといった流れである。基本的に喫煙所で見られるやりとりにはこのようなパターンが多いが、この情報提供の部分が、モノの提供であったり、助けを求める相手に協力する行動であったりと、いくつかのパターンがあるため、ここではこのような一連のやりとりの最後に見られる「ありがとう」などの感謝という行動に注目してみたい。感謝という行動があるということは、その人にとって何かしらのメリットがあり、感謝するに値する行為があったと考えられるからである。

以下に示す表2が、今回記録した全会話ログのケース別に含まれる感謝行為の数をまとめたものである。

表2 ケース別の感謝行為数

	日付	時刻	場所	対話相手	感謝行為の数
ケース1	8月16日	A.M.11:00頃	長崎市内 某喫煙所	地元民のおじさん数名	5件
ケース2	8月16日	P.M.12:00頃	長崎市内 同喫煙所	三菱自動車の若手社員	1件
ケース3	8月21日	P.M.2:00頃	同志社大学新町キャンパス喫煙所	大学の警備員	0件
ケース4	8月23日	P.M.12:05頃	内定者研修会場の喫煙所	経営企画部部长Sさん 同期K君	4件
ケース5	8月23日	P.M.10:00頃	新幹線内の喫煙所	外国人留学生	2件
ケース6	9月26日	P.M.12:20頃	同志社大学新町キャンパス喫煙所	同学年の友人H君 2回生のT君	1件
ケース7	10月1日	P.M.12:00頃	内定式会場の喫煙所	経営企画部部长Sさん 執行役員Aさん 同期数名	2件
ケース8	10月2日	P.M.8:00頃	新幹線内の喫煙所	シャープの中堅社員	3件
ケース9	10月6日	P.M.2:20頃	同志社大学新町キャンパス喫煙所	同学年の友人T君	2件
ケース10	11月6日	P.M.2:00頃	同志社大学新町キャンパス喫煙所	同学年の友人T君 同学年の友人Y君	3件

上の表2を見てもらえればわかる通り、今回記録した10件の会話ログには計23件の感謝行為が見られ、それらは特に偏っているわけでもなく各ケースにおいて万遍なく行われている行為であることがわかった。この各ケースの感謝行為を見てみると、やはりある一人が何かしらの質問をし、その相手が回答、情報提供し、最初の質問者が「ありがとう」等の感謝を示す一連の流れが多くを占めていた。また今回記録した会話ログの中では少なかったが、タバコを切らした人物がちょうどそこにいた人にタバコを求め、求められた人物はタバコを一本提供し、最初にタバコを求めた人物が感謝をする(ケース1)といった流れや、自分にとっては役に立たないがそこにいた人にとっては役に立つかもしれない招待券を無償で提供し、提供された人はそれを受け取り感謝する(ケース7)といった流れもみられた。つまり、各ケースごとの内容を見てみると、目の前の情報提供なり直接的な物品提供をしてくれた人に感謝をするという、社会的交換が見られ、喫煙所でのやりとりには少なからず互酬性があることが確認された。

厳密に言えば、目の前の何かをしてくれた当人にお礼をするという行為は一般的互酬性ではなく特定の互酬性である。例えば、表2のケース1において感謝行為は5件見受けられたわけだが、この一例だけを見ればその中でやり取りされている一連の流れは何かをしてくれた相手に対してお礼を言うという特定の互酬性なのである。しかし、この表2の10件のケースにほぼ万遍なく感謝行為が確認されたこと、またこのような感謝行為が全国の様々な喫煙所や初対面の見知らぬ相手において幅広く見受けられたことを考慮するならば、喫煙所でのこのような社会的交換はどの場所においても、どの相手においても、ごく普遍的に行われている一般的なことであり、この喫煙所において頻繁に行われる要求→応答→感謝という社会的交換が喫煙所の一般的互酬性を醸成していると考えることができる。

またこれに続き逆の視点からも分析を試みたいと思う。小林・池田(2005)は「一般的互酬性とは『AがBを援助したら、Aはコミュニティまたは社会の他の人から(Bには限らず)援助されるだろう』という規範的な認知」(小林・池田 2005:151)であり、もしそのコミュニティの成員がこの一般的互酬性を認知したならば、見知らぬ他者に対しても自発的な情緒的、道具的なサポートを与えるようになるという。小林・池田(2005)のこの知見を結果から先に考えると、見知らぬ他者に対しても自発的な情緒的、道具的なサポートを与える行為が見られれば、そこには一般的互酬性があり、コミュニティ成員はその一般的互酬性を認知している、と考えることができる。

このことを踏まえ、これから喫煙所でのやりとりをいくつか抜粋して、見知らぬ他者に対しても自発的な情緒的、道具的なサポートを与える行為が見られるかを確認していきたい。これから以下に挙げるのは、ケース1、ケース4、ケース7、の一部抜粋である。

－ケース1－

地元民:へえーこれから熊本向かうんね。そしたら雲仙の方むかって、、、57号通ると？

自分:はい、地図見たらそれがいっちゃんわかりやすいし、そのルートで行こうかと。

地元民:あー(周囲の地元民と顔を合わせながら)、それやったら途中から58号に入った方がいいよ。57号は車多いけん。58号入った方が気持ちよー走れると思うよ。(道具的サポート)

自分:あ、そうなんですか？そしたらその道も検討してみよっかな…。ありがとうございます。
います。

－ケース4－

Sさん:そういうことそういうこと(笑)だから植田さんもKさんも、初めはわからないことだらけだと思うけど、そういう時は先輩たちにどんどん頼って、たくさん学んでいって欲しいな。(情緒的サポート)

自分達:わかりました！

－ケース7－

Aさん、Sさん:あ、それなら僕らので良かったら吸いなよ。どっちがいい？笑 好きな方選び。(道具的サポート)

自分:えっ、いいんですか！そしたらマルボロの方を頂きます。ありがとうございます！

省略

自分:え、これ頂いていいんですか？

Sさん:うん、といってもこれうちの社員みんなもらえるやつだから、気兼ねなくどうぞ(笑)(道具的サポート)

自分:ありがとうございます！

今見てもらったのはいくつかの会話ログの中で行われたやりとりの一部抜粋であるが、ここではあえて筆者が自発的に相手に与えたサポートを選ばなかった。もちろん筆者から自発的になんらかのサポートを与えるといったやりとりもいくつかあったが、ここであえてそのような例を選ばなかったのは、今回記録した喫煙所のやりとりで見られる見知らぬ他者に対する自発的な情緒的・道具的サポートが単に筆者の性格によるものではないということを強調したかったからである。よって、ここに引かれている下線部の箇所はいずれも、筆者が求めたわけではないにも関わらず初対面やほとんど関わったことの無いような他者が自発的に情緒的・自発的サポートを筆者に与えてきた例である。

この数例から分析したことで、喫煙所には、見知らぬ他者に対しても自発的な情緒的、道具的なサポートを与える行為が少なからず存在することが確認でき、それは同時に喫煙所には一般的互酬性があり、コミュニティ成員（ここでは喫煙者にあたる）はその一般的互酬性を認知しているということも明らかにできたのではないだろうか。

この節では、喫煙所でみられる社会関係が社会関係資本であるならば、いったい何が喫煙所を社会関係資本たらしめているのか、という疑問に対し社会的交換、一般的互酬性の視点から分析を行った。分析の結果、どの場所、どの相手においても、ごく普遍的に頻繁に行われる要求→応答→感謝という喫煙所内の一連のやりとりが社会的交換に相当し、それが一般的互酬性を醸成していたことがわかった。また逆の視点からの分析では、喫煙所において、見知らぬ他者が自発的な情緒的、道具的なサポートをすることが少なからず

存在することが確認できたことから、喫煙所には一般的互酬性が存在し、またそのコミュニティ成員（喫煙者）はその一般的互酬性を認知しているということがわかった。よって、この二つの結果、つまり喫煙所において見られた社会的交換、一般的互酬性が根幹となり、喫煙所の社会関係を社会関係資本たらしめていたのである。

3.4 分析のまとめ

本稿ではここまでで、喫煙所にはいったいどのような社会関係が見られ、どのような機能があるのか、またそのような社会関係や機能はどのように生成されているのかという疑問を弱い紐帯や社会関係資本の概念をベースに論じ、喫煙所の実態に迫ってきた。

分析の結果を先に述べるなら筆者は今回の分析を通じて、1.喫煙所には弱い紐帯から成る社会関係が存在すること、2.喫煙所は弱い紐帯のポジティブなアウトプットを享受できる機能を持つこと、3.喫煙所には社会関係資本の根幹となる社会的交換や一般的互酬性が確認され、それらが喫煙所を社会関係資本たらしめていたこと、の三点が明らかになった。

詳細な流れとしては、まずはじめに3.2 (1) 統計的な分析では、グラノヴェッターの二者間の紐帯の強さを測る指標を用い、喫煙所で実際に筆者とやりとりした14名の人物が強い紐帯の傾向にあったのか、弱い紐帯の傾向にあったのかの分析を試みた。結果、今回記録した対象者14名は全体的に弱い紐帯の傾向にあったことが明らかにされた。それに加え、今回記録した会話ログ全10ケースの中にどれほどの有益な情報が含まれていたかを抽出し、結果喫煙所では一度の会話につき平均2.2件の有益な情報交換が交わされていることがわかった。ここでいう有益な情報とは、自分の属する社会圏では容易に入手することの難しい情報のことであり、(2)の質的な分析において、実際に喫煙所で交換された情報がそれに該当するものであったかを検証した。筆者が記録した会話ログケース1、ケース6、ケース7の全容に含まれる数々の情報を分析した結果、それらはまさしく自分の属する社会圏では容易に入手することの難しい情報であり、つまりは弱い紐帯によってもたらされるポジティブなアウトプットであったことから、このような情報をもたらしめた喫煙所の社会関係は弱い紐帯であり、喫煙所は弱い紐帯のポジティブなアウトプットを享受できる場として機能していることを筆者は示した。

次に筆者は、喫煙所で見られる社会関係が弱い紐帯であり喫煙所はその恩恵を授かれる場であったことから、喫煙所は、貴重な情報の提供という同じ恩恵を特徴にもつ橋渡し型の社会関係資本でもあると展開した。そして喫煙所を橋渡し型の社会関係資本ととらえた時、いったい何が喫煙所を社会関係資本たらしめているのかという分析を3.2 (2) 会話ログ分析 (2) で試みた。

会話ログ分析 (2) では、オンライン上での社会関係資本形成の過程を論じた小林・池田 (2005) の知見を借り、社会的交換と一般的互酬性の視点から、喫煙所での社会関係資本形成要因分析を試みた。

まず筆者は、喫煙所で頻繁にみられる要求→応答→感謝という一連のやりとり、また感謝という行為すなわち一種の社会的交換に注目し、全会話ログから感謝行為の抽出をはかった。この結果、喫煙所における感謝行為が全国のどの場所、どの相手に対しても普遍的に行われていることがわかり、また喫煙所で行なわれる感謝行為という社会的交換が、一般的互酬性を醸成していたことを示した。また、いくつかの会話ログを抜粋、検証した結果、喫煙所でのやりとりには一般的互酬性の恩恵である、見知らぬ他者に対しても自発的

な情緒的、道具的なサポートを与える行為が少なからず見受けられたことから、少なからず喫煙所には一般的互酬性があることを確認した。

おわりに

今回本稿を書くにあたったきっかけは、筆者が日頃から体感していた喫煙所におけるメリットを明らかにし、喫煙行為には百害あっても一利くらいはあると言いたかったからである。その点今回の調査、分析から喫煙所の恩恵が確認されたことに対しては非常に満足しているが、やはり調査を進める上でいくつかの課題が見つかった。一つは、何においても今回行った調査方法が若干の不確かさを抱いた点である。調査方法に関しては筆者の最善を尽くしたつもりではあるが、やはり実際の喫煙所では今回記録した以上のやりとりが行われていたにも関わらず、それらすべてを記録できなかつたこと、またそれゆえ今回分析に用いたデータそのものに偏りがあったのではないかと、という懸念が残ったことが非常に惜しく、今後の研究に期待したいところである。

また今回の調査、分析によって得られた結果は、喫煙所に関する研究のごく小さな一歩であり、喫煙所を通じて実生活にどれほどの影響があるかなどの実用的な分析にまで至らなかつた点も心残りである。例えば、企業内にある喫煙所に通う者とそうでない者では情報の保有量や昇進などに違いが出るのか、などの喫煙所でもたらされる恩恵が実生活にどのような影響を与えるのかという発展的な研究も今後期待したいところである。

(25,096 字)

[参考・引用文献]

- Granovetter, Mark S, 1973, “The Strength of Weak Ties.” *American Journal of Sociology*, 78:1360-1380. (=2006, 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 123-154.)
- 小林哲郎・池田謙一, 2005, 「オンラインコミュニティの社会関係資本」池田謙一編『インターネット・コミュニティと日常世界』誠信書房, 148-184.
- 金光淳, 2003, 『社会ネットワーク分析の基礎——社会関係資本にむけて』勁草書房.
- 藤原武弘, 2009, 「第7章 対人関係と対人魅力」藤原武弘編『社会心理学』晃洋書房, 101-103.
- 小林茂雄, 津田智史, 2008, 「喫煙所における見知らぬ他者への声のかけやすさ」『日本建築学会計画系論文集』73(623): 93-99
- Coleman, James S, 1988, “Social Capital in the Creation of Human Capital.” *American Journal of Sociology*, 94:S95-S120. (=2006, 金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 205-238.)
- Burt, Ronald S, 2001, “Structural Holes versus Network Closure as Social Capital.” *Social Capital: Theory and Research*, 31-56. (=2006 金光淳訳「社会関係資本をもたらすのは構造的隙間かネットワーク閉鎖性か」野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 243-273.)
- Granovetter, Mark S, 1994, “Getting A Job: A Study of Contacts and Careers.” Harvard University

Press. (=1998 渡辺深訳『転職——ネットワークとキャリアの研究——』ミネルヴァ書房.)

宮田加久子, 2004, 「ソーシャル・ネットワークのメディアとしてのインターネット ; オンライン・コミュニティにおける社会関係資本の形成とその効果」『認知科学』認知科学学会, 11(3) :182-196.